

## 祝！同窓生が母校の准教授に就任

## 「就任のご挨拶」

琉球大学医学部附属病院光学医療診療部 准教授・部長 外間 昭（2期生）



平成26年4月1日に琉球大学医学部附属病院光学医療診療部の准教授・部長を拝命致しました2期生の外間昭と申します。琉球大学医学部医学科の同窓会の皆様にご場をお借りしてご挨拶申し上げます。

私は、昭和63年琉球大学を卒業し、斎藤厚教授が主宰する歴史ある第一内科（感染症・呼吸器・消化器内科学講座）に入局しました。併せてウィンドサーフィン部の顧問でもお世話になっていた岩永正明教授の細菌学講座の大学院に進み、「腸管病原菌の定着因子の解明」の研究で医学博士を取得しました。病院診療では、金城福則准教授のご指導のもと下部消化管グループとして潰瘍性大腸炎やクローン病などの難治性の炎症性腸疾患の診療に携わり、多くの関連病院で研修を積みました。一方、平成11年から2年間米国ボストンのハーバード大学マサチューセッツ総合病院の免疫病理学教室に留学し、炎症性腸疾患研究で高名なAtul Bhan教授と溝口充志先生（現、久留米大学免疫学講座教授）のもと私自身の主研究となった「腸炎発症の自己抗原Galectin-4」を発見する幸運に恵まれました。平成17年からは、藤田次郎教授の高い理想とご指導により感染症、呼吸器と消化器の各グループが切磋琢磨しながらも一致協力して診療し研究する新しい第一内科で、医局長と講師を務めさせて頂きました。現在は外来や内視鏡診療ばかりでなく、若手医師や大学院生と共に腸結核・サイトメガロ腸炎・糞線虫症・Whipple病の免疫病理学的研究、炎症性腸疾患における生物学的製剤の治療効果や全身性炎症に関連した消化器疾患の臨床研究に邁進しております。

さて、光学医療診療部は、消化器内視鏡と呼吸器内視鏡で診

療を行う全ての診療科と密接に連携した中央診療施設の部門です。平成13年に創設された比較的新しい部門ですが、院内の全診療科のご協力を仰ぎながら年間3300件の内視鏡診療を行い、高度医療を担って参りました。近年では消化管腫瘍の内視鏡治療、消化管・肝胆膵・気管のステント治療、小腸内視鏡などが日進月歩の目覚ましい発展をみせています。何よりも安全な医療を心掛けながら、地域と連携し大学病院ならではの診療と研究を行いたいと思います。

母校で責任ある立場となることはとても名誉なことです。元来教えることが大好きな私ですので、病院や医学部の若い「人材」を育むことに大きな喜びを感じています。教える立場とはいっても、実は私自身が学ぶことばかりです。毎日楽しく接している若人は私には宝物のようであり、正に「人材」ともいふべきで、専門医の育成と学生の教育に携わる立場を与えて頂いたことへの感謝と責任の重さをひしひしと感じています。これまでに私自身が多くの素晴らしい先生方に教え導かれたことへのご恩返しに、自らが光学医療診療部と琉球大学医学部の発展の為、全身全霊で臨む所存です。今後とも同窓会の皆様のご指導とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。



6年生と共に

祝！同窓生が地区医師会の会長に就任

**「船橋市医師会会長就任の挨拶」**

医療法人社団 弘成会 コミュニティクリニックみさき 玉元 弘次 (1期生)



琉球大学医学部医学科同窓会ならびに関係各位の皆様、1期生の玉元弘次でございます。私は平成26年5月24日一般社団法人船橋市医師会総会に於いて代表理事（医師会会長）に選出されました。

船橋市は千葉県の東葛南部地区にある中核市です。千葉県では千葉市に次ぐ人口62万人の規模の市です。船橋市医師会は昭和12年に発足した77年の歴史がある医師会です。船橋市医師会は行政と連携し全国に先駆けて年中無休の夜間急病診療所を開設し、さらに船橋市立医療センターの開設後はこれも全国で初めての24時間体制のドクターカーシステムを導入しました。介護保険が開始する前には船橋市医師会独自の在宅医療の仕組みを考案されています。偶然にも最近の「地域包括ケアシステム」によく似た仕組みでした。

このような先進的な医師会の会長を拝命されたことは誇りでもありますが重責につぶされるのではないかと不安もあります。私は沖縄県宮古島出身です。10歳で東京に転居し都立三田高等学校を卒業しました。昭和62年琉大卒業後には東京に戻り東京民医連で研修しました。平成2年千葉県松戸市の千葉西病院（現在の千葉西総合病院）の立ち上げ直後に徳洲会グループの勧誘を受け同病院で整形外科医として勤務しました。その後徳田虎雄理事長の直接の依頼で船橋市にある千葉徳洲会病院に医長として移動しました。このことが船橋市に移り住むきっかけとなりました。若い頃の私は上司に平気で意見するところがあり、当時の千葉徳洲会病院院長「村田恒有（日本赤軍最高幹部の重信房子被告をかくまったとして犯人蔵匿と隠避の罪に問われた医師）」とそりが合わず結局開業することになりました。このような経歴の

私を船橋市医師会の諸先輩方は快く受け入れていただきました。整形外科医会や医師会ゴルフ同好会などの活動を通して会員と交流を深めていきました。

私の開業した場所は船橋市でも中心から離れた場所にあるため医師会の役員などとは無縁だと思っていましたところ、平成18年の医師会選挙で改革派の執行部が誕生したため反対派の理事が多数降りてしまい、当時の会長の要請で平成20年に医師会理事に就任しました。私は開業医ではありませんでしたが平成11年に介護老人保健施設を開設し、介護保険関連の知識があったため医師会では介護保険担当となりました。平成22年には副会長となり4年間行政の仕事で各委員会の委員長などを経験しました。副会長2期目の平成24年以後には行政の幹部クラスは、相談事などは会長ではなくなぜだか副会長の私とするようになっていました。田舎の琉大出身のため威張ることが出来ない性分が幸いしたようです。今回の医師会選挙は現職の会長と副会長の争いになってしまいました。本来は話し合いで済ませることが良いことだと思いますので会員の先生方には申し訳なく思っています。選挙は組織が分断されかねません。今後はひとつの群れとしての船橋市医師会を再構築しその名に恥じない努力を続ける所存です。

これからの琉大医学部医学科同窓会のますますの発展を期待しております。今後も同窓会の先生方と交流し、顔の見える関係作りを築きあげていきたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

医療法人 賢儀天寿会

☎ 972-6000 (代表)

**うるま記念病院**

## 琉球大学医学部医学科同窓会会長退任のご挨拶

前医学科同窓会会長 増田昌人（2期生）  
琉球大学医学部附属病院がんセンター長・診療教授



この度の第21回総会にて、5期10年務めた琉球大学医学部医学科同窓会会長の職を退任することになりました。先ずは、会長在任中にお世話になった多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

これまでの、5期10年を省みたいと思います。

### 1. 就任の経緯

2001年3月に第4代会長の健山正男さんから、次の医学科同窓会会長就任の打診が有りました。当時は英国留学から帰り、第二内科の血液・腫瘍内科グループのチーフとなっただけで、心の余裕もなくお断りしました。2年後、健山会長から同様のお話があり、再度お断りしました。しかし、その時は健山会長も諦めずに私を訪れること三度、最後は第二内科講師室で、同じ第二内科講師の島袋副会長（当時）とお二人で、説得されました。健山会長の熱い思いに応えるほかはないと思い、会長職を内諾しました。その後は、二期生代表の3名の同窓会評議員の承認、二期生メーリングリストでの承認、評議員会での審議、推薦を経て、第11回総会で正式承認を頂き、2003年8月に第5代会長となりました。

### 2. 当初の問題点；未認知と誤解

当時は、医学科同窓会が未だ沖縄の医療界どころか母校の医学部からも認知されていない状況でした。さらに、同窓会はある特定のクラブ出身者が作った偏った集団であるという誤解も強くありました。このため、学部長、病院長はじめ全教授に対して、個別に就任挨拶と同窓会の紹介を行い、誤解を解くように心掛けました。例えば、学内の諸行事には積極的に参加し、入学式、卒業式、その他の行事に同窓会会長としての挨拶をプログラムに正式に入れてもらえるように努力しました。教授の就任・退任のご挨拶を始め、冠婚葬祭には欠かさず出席するようにしました。その結果、今日では、同窓会は中立・公正を保った団体であると認知されています。

また、琉球大学同窓会の評議員に推薦され、その後は大学同窓会でも積極的に仕事を行いました。大学同窓会総会の会場設営や駐車場係、案内

係や受付に始まり、琉球大学及び大学同窓会の周年行事の実行委員、役員選考委員等も務めました。その結果、毎年の同窓会総会に大学同窓会会長が出席して下さるようになり、最終的には有難いことに琉球大学学長にも出席していただけるようになりました。

また、定期的に同窓会の活動を、学部長、病院長へ広報するようにしました。すると、医学部（含む附属病院）側からも要望事項等が出るようになり、結果的に医学部幹部と我々同窓会役員が話し合う機会を得て、現在「医学部と医学科同窓会との懇談会」の定期開催に発展しています。

### 3. 次の課題；医師国家試験合格率低迷と教授選

会長就任時から、国試合格率は良くありませんでしたが、私が就任後急速にその順位を下げ、残念ながら国公立大学では最下位かそれに近い成績となりました。同窓会として、医学部へ改善要望を出すとともに、医学科6年生（学生会員）及び国試浪人生（正会員）への国試模試代金の負担、国試予備校のカリスマ講師による学生向け講演会、同教員向け講演会等いろいろと対策を行いましたが、私の力不足で、在任中には全く効果が認められませんでした。次の新役員に、引き続き対応をお願いしたいと思います。

また、会長就任時より、正会員から母校の医学部の教授を輩出することは同窓会会長としての義務ともいえるものでした。就任時から、学部長、医学科長、医学研究科長、病院長等には協力をお願いをし、その後も異動が有るたびにお願いをしてきました。近年では、学長・副学長、琉球大学同窓会長・副会長、詳細は書けませんが七帝旧六等の大学関係者やその他考えられる多くの方々に協力を依頼しました。もちろん、医学科関係者にも働きかけを行いました。しかし、私の力不足で、在任中には全く効果が得られませんでした。この件も、次の新役員に引き続き対応をお願いしたいと思います。

### 4. その他の課題と新規事業

会長就任時から支えてくれた蔵下要副会長、田名毅副会長、屋良さとみ会計（後に副会長）、そして2年前から就任した平良民子会計からの様々な助言・提案により、色々な課題の改善及び新規



## 祝！同窓生が初の母校医学科教授に就任

## 琉球大学大学院医学研究科麻醉科学講座 教授に就任して

琉球大学大学院医学研究科麻醉科学講座 教授 垣花 学 (5期生)



琉球大学医学部医学科同窓会の皆様、日頃より大変お世話になっております。私は、琉球大学医学部医学科5期生の垣花学です。この度、平成26年5月1日付で琉球大学大学院医学研究科麻醉科学講座 教授に就任いたしました。同窓会の蔵下会長のはからいで、同窓会誌「南風」

で皆様へのご挨拶の機会を頂きました。これまでの同窓会誌に目を通していると、「琉球大学医学部医学科卒業生から母校の教授を輩出することが、医学科同窓会の悲願」ということがひしひしと伝わってきておりましたので、今回の教授選考期間は多少なりとも重圧を感じておりました。今回の決定について、ホッとしているところです。医学部医学科卒業後、ここに載せることができないほど多くの方々にご指導頂き、また事あるごとに激励を頂きましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

私は、平成3年(1991年)3月に琉球医学部学科を卒業し、麻醉科に入局と同時に大学院へ進学しました。大学院卒業後、縁があり1996年にカリフォルニア大学サンディエゴ校麻醉科へ留学し、私のライフワークとなった虚血性脊髄障害の研究と出会いました。1998年から2年間は沖縄県立宮古病院に勤務しましたが、そこで離島医療における麻醉科医の役割の重要性や1症例を大切に考察する症例報告の重要性を認識しました。2000年から再び琉球大学附属病院麻醉科に戻り、第2代琉球大学麻醉科学講座教授

須加原一博先生(現：琉球大学副学長・理事)のもと臨床、研究そして教育に従事してきました。さらに、2009年にはハーバード大学医学部の関連病院であるマサチューセッツ総合病院麻醉科にVisiting Scientistとして再び研究留学させて頂き、ハーバード大学麻醉科と琉球大学麻醉科の連携を構築しました。これら一連のことは、一般病院の勤務医として経験することは難しいと思われませんが、琉球大学に籍を置くことで得ることができた貴重な経験として、現在の私の礎になっております。

琉球大学医学部麻醉科は初代教授 奥田佳朗先生、第2代教授 須加原一博先生の両教授が約30年にわたり育て上げた教室です。私が聞いたところによると開講当初は教授、助教授を含めてたった6名の麻醉科医で手術麻醉を運営していたようです。現在では、13名の麻醉専門医、7名の麻醉標榜医、3名の後期研修医が手術室、集中治療室そして麻醉科外来を運営しています。また、およそ20年来交流しているカリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)へ1名の医局員を留学させており、脊髄への神経細胞移植の研究に従事しております。ご存じのとおり、医療技術の進歩により低侵襲手術が趨勢となったため、高リスク因子を複数もつ患者でも手術をうけることができるようになりました。また病院経営上、手術症例数は増加し続けており、それをこなすために夜

中まで麻醉管理を行うことも稀ではありません。そのため、麻醉科医の精神的・肉体的負担も徐々に大きくなっており、麻醉科長となった私の立場では病院経営を考えながら、医局員の負担の軽減策も考慮していかなければならないとも思っております。

昨今、国公立大学・大学院にはその存在意義の再確認として、「そのミッションは?」ということが問われています。特に地方大学では、その存在意義を明確にし、大学改革を推進することが求められています。琉球大学医学部に関しては、教育・研究ならびに附属病院における臨床がその存在意義を示すキーワードになり、琉球大学の麻醉科学講座もこのキーワードでの存在意義を示さなければならない状況です。現在、基礎医学講座・臨床講座には新進気鋭の教授が続々と就任しています。そのおかげで琉球大学医学部は改革に取り組み、その特有の教育、発展性のある臨床・研究を立ち上げており、私もそれに遅れないように必死になっているところです。これらの成果は徐々に表れており、例えば先の医師国家試験の合格率の回復は、教務委員会、教育企画室などの活動の成果だと思えます。麻醉科学講座は、分子生理学講座、薬理学講座、細菌学講座、脳神経外科学講座そして第二内科とともに「ガスバイオロジー」をテーマに共同研究を開始しており、全国にも類を見ない独創的な研究を行っているところです。これらの研究テーマを中心に、大学院生とともに着実に、かつインパクトのある研究成果を出していきたいと思っています。

臨床講座の長(教授)は、臨床・研究についてその専門性を有し(全国レベルで認められる程度)、時代が求める多様な変化を見極め講座の運営を円滑に行うことが求められます。これは、最高学府としての「人を育てる」という使命を成し遂げるに必要な要素であると思えます。大学における臨床・研究には、これまでの多くの同窓生(10期生まででしょうか?)が経験しているように、生命科学や医科学への理解、医療への貢献のみならず医療行為に不可欠な洞察力・思考力・問題解決力を構築するポテンシャルがあります。しかしながら、初期臨床研修制度の開始以降に大学での教育・研究を行う卒業生(同窓生)が非常に少なくなっており、今後琉球大学医学部医学科の教授に就任できる同窓生がはたして増えてくるのか(?)と不安にも思っています。今後、わが母校の発展を考えるのであれば、次から次へと同窓生の教授の誕生が必要です。同窓会会員の皆様にも、このことを再認識していただき、少しでも多くの医学生や初期研修医に琉球大学医学部での教育・研究への従事を薦めていただけようようお願い申し上げます。同窓生のひとりとして、同窓生の皆様と一緒に仕事ができることを楽しみにしています。

今後とも、琉球大学医学部医学科ならびに麻醉科学講座の発展に、ご助言・ご指導をお願いいたします。

事業を始めることができました。主なものとして、①評議員会の定例化、②三役会の新設と定例開催及び常任委員会の廃止、③本学同窓会との連携、④総会開催日の7月第3日曜日（海の日の前日）への変更、⑤総会での各期持ち回りの記念講演会の新設、⑥総会での記念シンポジウムの開催、⑦総会での卒後10周年と20周年記念同期会の新設、⑧個人情報保護法施行による諸問題の弁護士との協議、⑨会計処理に関して税理士への依頼、⑩「医師賠償責任保険」と「所得補償保険」の事業開始、⑪1期生から10期生までの中から選ばれた各期1名計10名の委員による「同窓会役員選考委員会」の新設と同委員会の提言書による次期役員選考・推薦が挙げられます。

## 5. 今後の課題

私たちの同窓会にとって一番大切なことは、知的職業集団として、国民、特に沖縄県民のために質の高い医療を提供していくことであり、そのために医学部、大学、大学同窓会、沖縄県医師会、沖縄県等の関係諸団体に対して、利益団体として影響力を強めることであると思います。次に、会員相互の親睦と広い意味での福利厚生を提供する

ことです。

これらを実現するためにも、①総会・評議員会への出席者の増加、②年会費収入を増やすことによる財政基盤の安定化、③東北、中部、中国、四国支部の新設、④代表者の定めのある権利能力なき社団から一般社団法人化への移行、⑤同窓会事務室の医学部内への移転、等が必要であると思います。そして何よりも設立20年を迎えた我が同窓会に大切なことは、医学部に教授を輩出していくことだと思えます。

## 6. 会員の皆様へ

5期10年を振り返り、自己評価をするならば、停滞の10年と言わざるを得ません。特に優秀な人材が副会長、会計として補佐し、長期間同窓会を率いたにも関わらず、医学科の教授を一人も輩出することができなかった会長としての責任は重く、総会でもお話しした通り、今回この責を取って退任いたしました。

今後は、蔵下新会長を中心とする新執行部が若い力で同窓会を運営していきます。今後も医学科同窓会の発展にご協力をいただきますことを切にお願いして、会長退任の挨拶といたします。

## 祝！同窓生が沖縄県保健医療部統括監に就任

## 「現役人生は長いです」

沖縄県保健医療部 保健衛生統括監 国吉秀樹（4期生）



同窓生の皆さまこんにちは。この度、蔵下要会長から原稿のご依頼をいただき、「南風」に書かせていただくことになりました。光栄に思います。日頃は同窓会の活動にほとんど参加できておりませのでたいへん恐縮ですが、ご海容下さい。

さて、沖縄県では、平成26年4月に組織が再編され、新しく保健医療部ができました。そして、私はこの部の最初の保健衛生統括監に就任することになりました。統括監というのは、以前は次長と呼ばれていた職で、各課を統括し、部長を補佐する役割を担っています。部長の代理を務めることもありますので、なかなか緊張感があります。もうすぐ県議会の6月定例会が開会されますが、本会議場のマイクの使い方レクチャーを受けたときは、一気にリアリティが増しました。

今年度の保健医療部のコンメンは3つあります

たこと（笑）と、「おお、私はあと36年も行政で働くのだな」と嘆息したことを覚えています。その頃思い描いていたゴールは（当時の）環境保健部の部長として沖縄県の保健医療に関わることでした。21年が過ぎようとしている今、どうやらそれに近い立場になってしまいましたが、統括監としてまだこれといった仕事をし、成果が得られたわけでもありません。今からがんばっていこうと思います。もうあと15年の時間しか残されていませんが、できることは何とかやっていきたいものです。

ここ3～4年、貴誌をはじめ、医師会等の会報に拙稿を掲載いただく機会が何度もありました。私は宮古保健所を振り出しに八重山以外の保健所で長年所長ではない医師として勤務してきました。それが、平成23年に県健康増進課長になり、2年たったと思ったら那覇市の中核市移行に伴う保健所設置のために初代の所長として県から出向したかと思えば、基礎を築いてきた保健所の